
性 の 歴 史 I ————— 知 へ の 意 志

第一章 我らヴィクトリア朝の人間

・性の「言説化」～セクシャリテの装置の形成

まず、フーコーが説くのは性を廻る言説形成の働きについてである。ここではセクシャリテについて人が言うところのアウトラインが描かれ、そこでは、通常、性の抑圧と呼ばれる仮説が幅を効かせており、それこそが権力と快楽（性）の関係の全てであるかのように言われている。

ここで成されるのは、そういった「抑圧の仮説」を、セクシャリテについて言われることの総体に差し戻すことであり、それらの言説化自体を問題の俎上に乗せることである。抑圧を軸に幾つかの歴史的な問題が仮構され、それらを通じて、まなざしは〈権力＝知＝快楽〉の体制へと向けられる。問題となっているのは、性であり、権力であり、その両者を取り結ぶ関係の様態なのだが、それらを貫いているのは、全般的な言説の生産・管理構造なのであり、そういった知への意志なのである。

フーコーの記述は、この言説や権力や知の産出の変動に忠実に視点を移動させながら、問題を提言し、それらのプロセス押さえていく。取敢えずこの本は歴史の書物であるというフレームを固持しており、哲学的主張や予言者的な憶断は慎重に遠ざけられている。しかし、フーコー自身はこの本を書き終えた後リュセット・フィナスの質問に答えて、次のように述べている。

この本は実証的な役割をもった本ではありません。序曲のように鍵盤を叩いてみて、主題を素描し、読者がどんな反応を示すか、批評はどういうところへいくか、どんな怒りがかえってくるか、それをみるためにあるのです。いわばこうした反応のいっさいを受けて続巻を書きつぐために、この初巻を書いてみたのです。（中略）わた

しはこれまでに虚構以外のものはいっさい書いたことはありません。はっきりそう自覚しております。が、だからといってそれが真理の外にある、というつもりはない。虚構を真理のなかで働かせ、虚構のディスクリールをもって真理の効果をもたらす可能性はある、と思っています。(新評論刊：ミシェル・フーコー所収)

第二章 抑圧の仮説

1 言説への煽動

次に、「抑圧の仮説」という言説を通じて、それがどのような変動を被り、いかなる形態をあらわしてきたか、その変遷が辿られる。又、それとともに、性についての言説がどのようなものと結び付けられ、なにを意味することになるのかが、後の展開の序奏のように言われている。

見えてくるのは、権力による性の言説の抑圧といった単一の構図ではなく、「様々な制度の中で機能している一連の仕組みによって生み出されている多様な言説」であり、そういった言説が、多様な要因を通じて、次第に増大していく、「言説への、調整された多形的な煽動」の過程である。そういった社会の成立を象徴的に示しているのが、「1867年のラプクール村の事件」であり、そこに、そのような社会が、性についての些細な事柄に至るまでを、いかに狩り出し、語り、分析し、認識する仕組みを形成しているかが見てとれる。

つまり、近代社会におけるセクシャリテを廻る言説の特性は、「性について常に語るべしとの使命を自らに課すこと」であり、「性を秘密そのものとして評価すること」である。

2 倒錯の確立

前節で「抑圧の仮説」が性的言説の総体の中で、いかに拡大してきたかが述べられた訳だが、この節はそれに対する一般的な反論の提示から始まる。そこで持ち出されるのが、「生殖」という生産的なエコノミーに従わない性的欲望の形式として名指される「倒錯」と呼ばれる範疇の成立過程である。又、ここにフーコーは単なる禁止や抑圧と

は異なる、権力形式の4つの操作を列挙する。それは、1)近親相姦の禁止をはじめとする、少年の性を特別視して包囲する、新しい管理方式の形成、2)倒錯というものの組み込みと個人の新しい特性別定義の確立、3)快楽と権力との互いに闘ぎ合う二重の推力の循環的煽動の編成、4)「性的飽和の装置」即ち、家族という限定された性行動に基づく集団の増殖、である。

第三章 性の科学

1) 真理の問題（賭金・目的）としての性

第二章で言及された二つ事柄の確認からこの章ははじめられる。一つは「性の言説の増大」であり、今一つはそれらの多様な言説による「散乱する性的異形性」の定着である。そこから派生的に、性に関する知の分割が起こり、性が、所有さるべき真理への賭金となるのである。

2) 性の科学～「告白」という問題

東洋的な性愛の術を持たなかった西洋世界は、本質的に〈知である権力〉、即ち、「性の科学」を実践してきた唯一の文明だと考えられる。それは、所有すべき性の真理を廻って、社会的な言語化の手続きを展開してきた。そこに「告白」という問題が浮上してくる。

中世以来の告白の変遷は、そのまま真理を廻る政治史であり、「真理の産出にはことごとく、権力の関係が貫いている」ことを明らかにする。そこに人間の〔服従＝主体＝化〕が成立し、それらは全て告白という言説的形態において捉えられてきた。

3) 告白の拡大・性的欲望の起動

当初は主に教会儀式の場にあった告白が、やがて自らの領域を広げ、様々な社会的手続きへと分散していく。自らの快楽を分類し、記録するアルシーヴの形成、科学としての告白の成立、そういったものの中から出現する知への意志が、自身の言説と相関的な概念として「性的欲望」の装置を紡ぎ上げる。それは「判読すべき意味の場」であり、「特殊なメカニズムによって隠されたプロセスの場」であり、「際限のない因果関係の

結ばれる中心であり、狩り出すと同時に聞き取らねばならぬ不可解な言葉なのである。」とフーコーは書いている。

ここから一つの仮説が提案される。それは性の真理を廻る二つのプロセスの進展を通して、主体についての知が形成されたのではないか、という仮説である。

4) 知への意志の経済学に向けて

この章を通じて瞥見してきた、性の言説化において、西洋世界での性の科学は、特殊な性愛の術として機能してきたことが窺える。「快樂についての真実の言説というものに固有の快樂」。告白のシステムによって稼働された真理と快樂の装置から、フーコーは権力の問題へと向かう。そして、「このような知への意志に本来的に内在する権力の戦略を定義すること。性的欲望という具体的なケースについて、知への意志の経済学」を成立させることなのである。」と結んでいる。

第四章 性的欲望の装置

告白の制度化や、性現象にかかわる言説の拡大の中から、性的欲望の装置が構成されてくることは、前章までである程度述べられた訳だが、そこでは性の真理をめぐる二つのプロセスへの展開が示唆されていた。この章の中心的なテーマとなってくるのは、それらの「真理－知」をめぐる循環的プロセスの中で、性的欲望の装置がいかに機能していくか、ということになる。ここでは、それらは知の請願の中心に据えられた二重の請願と見なされ、主体（われわれ）と性の両面から、それぞれがどのように捉えられているかが問われるようになる。その両者の関係の中から、やがて、「権力」の問題系が、その輪郭を現すことになる。ヘーゲルのいうならば、ここで問題とされる「権力」は、主体と性を切り結ぶ「媒辞」の性質を備えている、といえるかもしれない。この章では、その権力形態を軸に、性的欲望の装置が読み解かれることになる。

1 目的

ここでいう目的とは、端的にこの本が示唆する方向の指示であり、この研究の指し示す目的である。それをフーコーは、権力の「分析学」へ向かうこと、言い換えれば「権

力の関係が形成する特殊な領域の定義と、権力の分析を可能にする道具の決定」に向かうものだという。

これまで当然のこのように語られてきた、抑圧的な権力という仮説は既に失格した概念であり、それはフーコーが「法律的一言説的」と呼ぶ権力の表象に、あまりに捕らわれてきた結果である。〔但し、冒頭部分にフーコー自身の立場の表明のようなくだりがあるが、そこでは、精神分析の立場から成された抑圧する権力の批判等とは微妙に距離を取り、明言を避け、これまでそれらを無視してきたやり方を弁明している。〕そこから、フーコーはこれらの権力の表象の特徴を幾つか列挙し、そこに王政の権力イメージの反映を見ている。それは、「自由に対して引かれた単なる限界としての権力」であり、それこそが「我々の社会」で権力が受け入れられるための一般的形態である、と。

これに対して、新しい権力のメカニズムは、人間の生命や人間それ自体を、部分的にではあれ生きた身体として引受け、そのような法律的王政イメージの残滓の中へと徐々に浸透してきている。ここから新たな問題の核心が表明される。それは、権力と、性についての言説との歴史的関係を考察するこの研究の目的が、「権力についての別の理論を手に入れることによって、別の歴史の読解格子を作ると同時に、歴史の材料を、僅かに近付いて見ることによって、徐々に、権力の別の捉え方へと進むこと」であり、この二重の課題を帯びている、ということである。

2 方法

前項で確定されたこの研究が進むべき方向は、ここで「性についての知の形成の、権力の関係における分析」といわれている。これを主導的とする分析により、新たな権力形態を記述する試みが目論まれている訳だが、ここで述べられているのは、権力のメカニズムの分析のための方法序説とでもいうべきものである。

フーコーはここで、権力とは無数の輻輳する力関係であり、それが行使される領域の組織を構成するエレメントであり、「勝負＝ゲーム」に類比されるものと考え、そこに幾つかの接戦を引くように方法的提言を行っている。それは先ず、戦争と政治によってコード化される多種多様な力という主張に沿うような分析の場の確定であり、次に、権力の関係の局地性、その支柱となる言説、総合的戦略の論理との結合へと問いを差し向けることだ、と述べている。そして、それは「性についての言説の夥しい産出を、多様かつ流動的な権力関係の場に沈めてみることだ。」という。

そこから、権力と性に関する予備的な手続きとして、慎重さから求められる4つの規則が立てられる。それは、1)内在性、2)不断の変化、3)二重の条件づけ、4)言説の戦術的多義性、という観点からする4つの規則であり、それは総体としての権力の問題が、言説の戦術的生産と権力の戦略的統合との相剋のなかにあり、この分析を進めなければならないのは、これら二つのレベルの相関関係なのである、ということを示している。

3 領域

次に性的欲望の領域に権力の関係が接合される。その領域は、「権力の関係にとって極めて密度の高い一つの通過点として立ち現れる。」とフーコーはいう。そこに、先ずは権力の戦略的統合の観点から、18世紀以降、性に関する知と権力の特殊な装置を発展させた4つの戦略的集合が導入される。それは、1)女の身体の高ステリー化、2)子供の性の教育化、3)生殖行為の社会的管理化、4)倒錯的快楽の精神医学への組み込み、の4点であるが、ここに形象化された4つの集合は、知の特権的な対象となり、同時に権力の戦略的拠点となる。

では、この戦略において問題となるのは何かというと、実のところそれは「性的欲望そのものの産出」に他ならないのではないか、とフーコーはいう。ここから、性的関係が出来せしむる2つの装置が指摘される。一つは、結婚のシステム、即ち婚姻の装置であり、いま一つは、それが政治的構造や経済的プロセスに置いていた基盤を失うに従い、婚姻の装置に重なりつつも、それを排除することなく、しかもその重要性を削減するのに貢献することになる新しい装置、つまり性的欲望の装置である。

この性的欲望の装置の、権力との癒合、拡大の傾向、生殖＝再生産の構造からの離反、それが生起する身体の高密化、を主要命題としながら、この装置の構成、その要素、変遷が記述される。それは先に挙げられた4つの戦略的集合の運動に重ねられつつ、歴史に働きかけるいくつかの結節点を浮き彫りにする。抑圧の仮説は放棄され、この『性の歴史』の時代区分が仮説されるに至るのである。

4 時代区分

執拗にいわれていた抑圧の仮説、その抑圧のメカニズムにおいては、二つの断絶が前提になるとされている。その一つは17世紀における、重大な禁止事項が確立されたこ

とによる断絶であり、いま一つは20世紀の、抑圧のメカニズムの弛緩、寛容化である。この点に注意を集めながら、具体的な年代の測定が、二つの視点からなされる。

1) 技術そのものの年代

この技術の形成点の中世キリスト教の告解の実践に求められる。それがやがて、本質的な部分で教会と聖職者の制度を離脱した新しいテクノロジーを産み出していく。それは性の問題が世俗化し、同時に国家の問題となる過程と重ねられる。教育・医学・人口学の三つの軸を特権的な領域として画し、それに従って発展していく。そして精神分析学は、19世紀末には、これらの領域に組み込まれていく〈倒錯—遺伝—病的変質〉のシステムのもつ政治的・制度的作用にはっきりと対抗した特異な位置にあった。こうした一連の性の技術の繁茂は、抑圧の時期という仮説とは合致しないのである。

2) 技術の普及と適用点の歴史

同様に、抑圧としての性的欲望の歴史を仮定するのであれば、性についての管理・統制は、それが貧乏人階級に向けられた時にこそ、厳密かつ苛烈なものであったと想定しなければならない。しかし、最も厳密な技術が形成され、集中的な適用を受けたのは、富裕な政治的指導層においてである。庶民的な階層は長らく装置の埒外にあったのであり、その歴史はやはり、限られた集中点から社会全体への普及の過程を辿るのである。

かくして、性が制限された一つの時代という考え方や、社会のあらゆる階層において一様なプロセスがあったということは、疑わしいものであることが判明する。そこで、最後にブルジョワジーにとって性的欲望は、どのような意味を担っていたのかが考察される。彼等にとっての性は自身の生の政治的な配列であり、自己主張をもたらし手段であった。そこでは性と身体が同一視され、この身体こそを性的欲望の装置へと仕立て上げていくのである。

第五章 死に対する権利と生に対する権力

最後に問題とされるのは、権力の適用範囲を劃する境界線の確定と、その全体的な領野の見取図の作成である。第一点は死と権力の問題であり、第二点は生（性）と権力の問題である。死は権力の限界であり、人間存在の最も秘密な点、公の手の届かぬ私的な点である。自殺は死に対する権利の個人の側への奪還であり、権力はそれゆえに死に固執してきた。

これに対して、生を経営・管理することを掲げてきた政治権力は、二つの主要な形態において発展してきた。一つは規律を特徴づけている権力の手続き、人間の身体の解剖－政治学であり、第二の極は身体を中心に据えた調整する管理である人口の生－政治学である。ここに、限無く生を取り込む権力の形態、「生－権力」の時代が始まる。それは資本主義と密接に結びつき、生を増大させる様々な方法を編成し、生きた身体を取り込み、価値を付与し、その力を配分し経営する。歴史の中への生命の登場である。

そうした中で、性は〈生に基づく政治的テクノロジー〉の発展の二つの軸の継ぎ目に位置している。前章で挙げられた4つの戦略的集合が、そのまま性の政治の攻撃ラインとなるのである。このような権力形態の変容を象徴的に示しているのが、権力の内部における重要な要素であった血の意味の下落、象徴的機能の低下である。この移行は血の象徴論から性的欲望の分析学への移行としてもたらされるのである。

以 上